

『東洋美術図譜』

夏目漱石

青空文庫

偉大なる過去を背景に持つている国民は勢いのある親分を控えた個人と同じ事で、何かに付けて心こころ丈夫じやうぶである。あるときはこの自覚のために驕きやうまん慢まんの念を起して、当面つとめの務おこたを怠たったり未来の計を忘れて、落ち付いている割に意気地いくじがなくなる恐れはあるが、成なり上あがりものの一生懸命に奮闘する時のように、齷齪あくせくとこせつく必要なく鷹揚おうよう自若じじやくと衆人環視の裡うちに立つて世に処する事の出来るのは全く祖先が骨を折って置いてくれた結果といわなければならない。

余よは日本人として、神武天皇じんむ以来の日本人が、如何なる事業をわが歴史上に発展せるかの大問題を、過去に控えて生息するもの

である。固^{もと}より余一人の仕事は、余一人の仕事に違いないのだから、余一人の意志で成^{じようじゆ}就^{じゆ}もし破壊もするつもりではあるが、余の過去、——もつと大きくいえば、わが祖先が余の生れぬ前に残して行つてくれた過去が、余の仕事の幾分かを既に余の生れた時に限定してしまったような心持がする。自分は自分のする事についてあくまでも責任を負う料^{りようけん}簡^{かん}ではあるが、自分をしてこの責任を負わしむるものは自己以外には遠い背景が控えているからだろうと思う。

そう考えながら、新しい眼で日本の過去を振り返って見ると、少し心細いような所がある。一国の歴史は人間の歴史で、人間の歴史はあらゆる能力の活動を含んでいるのだから政治に軍事に宗

教に經濟に各方面にわたつて一いちぼう望もちしたらどうたのいう頼母のしい回かい顧こ
 が出来ないとも限るまいが、とくに余に密接の關係ある部門、即
 ち文學だけでいうと、殆んど過去から得るインスピレーシちかまつョンの
 乏さしきに苦しむという有様ありさまである。人は『源氏物語』や近松
 や西さい鶴かくを挙げてわれらの過去を飾るに足る天才の發揮と見認みとめ
 るかも知れないが、余には到底とうていそんな己うぬぼれ惚ぼは起せない。

余が現在の頭を支配し余が将来の仕事に影響するものは残念な
 がら、わが祖先のもたらした過去でなくつて、かえつて異人種
 海の向うから持つて来てくれた思想である。一日余は余の書齋に
 坐つて、四方に並べてある書棚を見渡して、その中に詰まつてい
 る金文字のことごと名前が悉く西洋語であるのに気が付いて驚いた事があ

る。今まではこの五彩ごさいの眩まぼゆいうちに身を置いて、少しは得意であつたが、気が付いて見ると、これらは皆異國産の思想を青く綴とじたり赤く綴じたりしたもののみである。単に所有という点からいえば聊いささか富という念も起るが、それは親の遺産を受け継いだ富ではなくって、他人の家へ養子に行つて、知らぬものから得た財産である。自分に利用するのは養子の権利かも知れないが、こんなものの御蔭を蒙るのは一人前いちにんまえの男としては気が利きかな過ぎると思うと、あり余る本を四方に積みながら非常に意気地いくじのない心持がした。

『東洋美術図譜』は余にこういう料簡りようけんの起おこつた当時おこに出版されたものである。これは友人滝君たきが京都大学で本邦美術史の講演

を依託された際、聴衆に説明の必要があつて、建築、彫刻、絵画の三門にわたつて、古来から保存された実物を写真にしたものであるから、一枚一枚に観て行くと、この方面において、わが日本人が如何なる過去をわれわれのために^{こしら}拵えて置いてくれたかが善く分る。余の如き財力の乏しいものには参考として甚だ^{ちようほう}重宝な出版である。文学において悲観した余はこの図譜を得たために多少心細い気分を取り直した。図譜中にある建築彫刻絵画ともにあるものは公平に評したら下らないだろうと思う。あるものは『源氏物語』や近松や西鶴以下かも知れない。しかしその優れたものになると決して文学程度のものとはいえない。われわれ日本の祖先がわれわれの背景として作ってくれたといつて恥ずかしく

ないものが大分ある。

西洋の物数奇ものずきがしきりに日本の美術を云々うんぬんする。しかしこれ

は千人のうちの一人で、あくまでも物数奇の説だと心得て聞かなければならない。大体の上からいうと、そういう物数奇もやはり西洋の方が日本より偉いと思っているのだろう。余も残念ながらそう考える。もし日本に文学なり美術なりが出来るとすればこれからである。が、過去において日本人が既にこれだけの仕事をし、置いてくれたという自覚は、未来の発展に少すくなからぬ感化を与え、るに違いない。だから余は喜んで『東洋美術図譜』を読者に紹介する。このうちから東洋にのみあつて、西洋の美術には見出し得うべからざる特長とくちようを觀得かんとくする事が出来るならば、たといその

特長が全体にわたらざる一種の風致ふうちにせよ、観得えし得ただけそれだけその人の過去を偉大ならしむる訳である。従つてその人の将来をそれだけインスパイヤーする訳である。

——明治四三、一、五『東京朝日新聞』——

青空文庫情報

底本：「漱石文明論集」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年10月16日第1刷発行

1998（平成10）年7月24日第26刷発行

入力：柴田卓治

校正：福地博文

1999年8月4日公開

2003年10月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

『東洋美術図譜』

夏目漱石

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>